

アメリカ養鶏見てある記

細羽 広志

今年は、昨年をはるかにオーバーするアメリカビナが輸入されその成績のどうかが注目を集めています。世界一のヒナ輸出国アメリカの養鶏事情はどうか、さきに第2回養鶏視察団の一員としてアメリカの養鶏事情を見てこられた細羽ふ卵場主の細羽広志氏がこの9月県養鶏試験場で開かれた県種鶏改良研究会で、報告されました内容をここに掲載することとしました。

日本の養鶏業界は毎年著しい伸びをみせているが、外国とくにアメリカの情勢は資料によるのみで判然としない状況である。

幸いにして第2回養鶏団がアメリカの養鶏を調査することとなり、これに参加する機会を得たので、そのあらましをお知らせしよう。

1人で3万羽以上の管理をする

まず、インディアナ州（アメリカ中東部シカゴの南東部）の養鶏を観察すると、広大な土地にトウモロコシが畝1面に林立しており、その中に、といえるように20万、30万羽という鶏を飼養している養鶏場が点在している。

この付近は、冬期間には約1メートルの降雪をみる地域である。

クレイトン・ブラザー農場では成鶏も、中大すうもすべて平飼い鶏舎であり、初生びなは傘型育すうの方法を取っている。

大すうの育成場では、1ブロック6千羽で、その中には自動給餌器、給水器があるだけで、寝るときは、地面に甘蔗の殻を乾燥し粉碎したものを厚さ約10センチメートル敷き詰めて、その上に腹を付けて寝ます。このため鶏糞もよく乾燥するということがある。

成鶏舎をみると、1鶏舎に2万羽入れており、坪当たり35羽から36羽入れ、給水、給餌、集卵と選卵とすべてオートメーション化している。このため30

万羽飼養に管理の方は5～6人である。

アメリカの1人当たり平均飼養管理羽数は、平飼い、ケージを問わず3万羽となっており、この農場の飼養管理員数の少ないのは、平均以上のオートメーション化のためである。

ヘンハウス（産卵開始羽数で1年間の産卵数を除いたもの）は215卵強である。日本の場合を考えたとき、30万羽で215卵強というのは産卵率がよいといえることができる。

飼料は、900エーカー（360町歩）にトウモロコシを使っており、これを主原料として自家配合をし、蛋白は大豆粕と肉粕の乾燥を使って、大体蛋白16パーセントとしている。

アメリカ全体では、蛋白16パーセントというのが多く、なかには17パーセントというものもあり、またマイシン入りの飼料を使っているところもある。

ここは、900エーカー（1エーカーは約4反）の飼料畑を持っているが、30万羽飼養するには、2～3ヵ月分の飼料しかない。

このため、9～10ヵ月の飼料は近隣のトウモロコシ等を購入し、飼料を作っている。この地方の夏の平均気温は32度である。湿度が低いために日本よりやや涼しい感じであるが、換気扇を使って温度を3度くらい下げている。

また、冬は前述のように寒い地方であるので、5度を下げないように窓を調節している。一般的には5度の保つことは困難のように考えられるが、非常な密飼いであるため窓の調節のみで5度の保つことができる。

生存率は、月に1パーセントくらい駄目になっており、1年の生存率は88パーセントといていた。1鶏舎に2万羽入れている最新式といわれ鶏舎を見たが、2万羽1群で床は木のすのこの鶏舎で、その中には自動給餌器と給水器と卵箱があるだけである。すのこの下は2メートルくらい掘って、1メートル近く水を溜めており、すのこから落ちた糞は水に溶けるようになっている。丁度水洗便所式の鶏舎であ

岡山畜産便り 1963.10

る。

建設費は、2万羽鶏舎で5万ドルということであるから、日本円に換算(360円為替ルート)すると1羽当たり約900円でできることとなる。

種卵を洗っている

キンバーの原種農場と特約シインディアナ州で、最もふ化量の多いといわれているふ化場は、日本のふ化場と同じようであるが、不思議に思われたことは、種卵を洗っていることである。

一般的に考えると、ふ化発生に悪影響を及ぼすように考えられるが、この農場での試験結果では、洗卵した方がふ化率が良いということである。

また、初生びなのピーク・カット、これも機械化されており、価格は2万5,000円くらいで購入できるそうである。

デカルブ農場ではシーズン・オフのためひなの発生は見られなかった。ここでは、3万羽の原種鶏が飼養されており、その原種鶏の作出方法を聞いて見たが、十分知る機会が得られなかった。

しかし、感じたことはカタログ等の資料どおりとは思えないということである。

夫婦2人で副業的に養鶏をしている副業養鶏を見たが、ここは大農場と異なり1万羽を4列に区切って飼っており、ここでは給飼、給水、集卵等いずれも自動化されておらず、従って2人では非常に忙しい状況と見受けた。

ここでのヘンハウス(産卵数)は230から240卵である。また生存率は90パーセント前後ということだ。選卵機を見たが、アメリカの1万羽程度の養鶏場が使っている選卵機は、日本に最適なものではないかと思われる。

ハイライン農場では4元交配について説明を受けた。当场では、特に血液の研究と卵質の研究が行なわれていた。血液の研究は、血液型によって鶏の良否を決定するということであり、卵質の研究については、卵殻の破壊試験を実施していた。

ハイラインの特約種鶏場を見たが。飼料会社なのである。ハイラインの種鶏を1万羽飼っており、90平方センチ位の四角の窓が約2メートルおきに1つずつ着いている。鶏舎内に入ってみると30羽以上の

密飼いで、ために鶏はほとんど口を開けて喘いでおり、「これで大丈夫かな?」と思われたが、担当者の話では心配することはないということであった。

寒い地方では平飼い、暖かい地方ではケージ

飼養形態では、平飼い地帯で行くとケージは全然見ることはできず、このような地域は冬期間に降雪1メートルというような地域であり、反面、気候の温暖な地域、丁度日本のような気候のところでケージ飼養のみである。

産卵率は、平飼い鶏舎の方が少し低いようであり、ケージ鶏舎ではヘンハウスの平均が230~240卵で多いところは270~280卵である。

気候の良いところは夏でも27度を越えない。また冬も降雪をみることはないということである。このようなところはヘンハウス270~280卵と高い。カリフォルニア州のランダム・サンプル・テスト場は、このように恵まれた土地である。

経済能力検定を実施していたが、おそらく、ヘンハウス270~280卵以上の成績をあげていると思われる。

このほか、カルフォルニア州のケージ養鶏を視察したが、それらはすべて20万、30万羽の飼養羽数を持っている農場であったが、生存率は82~83パーセントであった。

中大すうの運動は考えない

鶏の更新については、12ヵ月、14ヵ月と種々である。

14ヵ月で更新する養鶏場でその理由を聞いてみると、「アメリカでは卵殻ということに重点を置いているため1年も産卵した場合が卵殻が薄くなり、卵そのものは大きいのが有利に販売できないので、産卵はするが約14ヵ月で更新する。」とのことである。

ひなの育て方にも2通りあり、始めから全然土を踏ませずにオール・ケージ・システムで飼養し、中大すうが成鶏ケージ(間口約33センチ)の目から漏れないようになると、1ケージに3羽ずつ入れ、1年になり1年半くらいに鶏を補充しない。また売るときは全部売ってしまう。

このようにケージに入れたままで飼養しており、

岡山畜産便り 1963.10

中大すうの運動等については全然考えていないようである。

また、もう1つの方法として、分業化されており中すう専門業者から、産卵開始直前の大すうを買い成鶏ケージへ入れる。

そうすると養鶏場には成鶏ケージだけあればよいので経済的であるというのだ。

中すう専門業を見ると平飼いをしており、この理由は、多くのひなを飼養することが理由からといわれている。

アメリカの30万羽、40万羽と飼っている養鶏場は、中大すうの運動を全然考えていない。それにもかかわらず生存率が高いということは今でも疑問の1つである。

(文責在記者)